

「商店街の空き店舗を活用した無料学習室の開放」
～工学部都市システム工学科3年次授業「設計演習Ⅰ」実践班の取り組み～

2014年9月

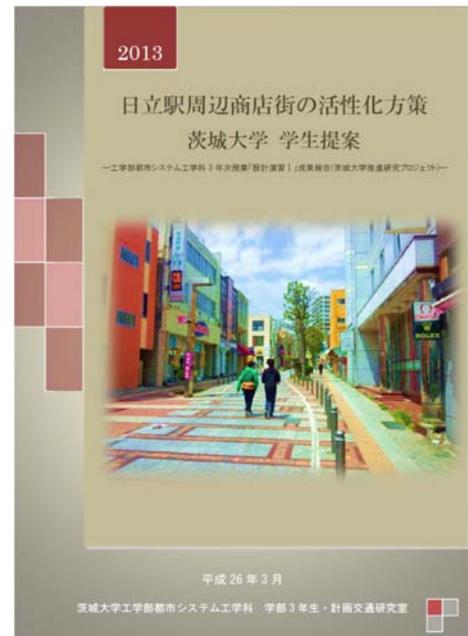
■2014年度の新たな試み～演習授業内での地域活性化策の実践

茨城大学都市システム工学科では、プロジェクト型学習として地域の抱える様々な課題に対して学生がチームとなって主体的に課題解決策を考える授業を、20年近く前から導入し、続けています。3年次前期の「都市システム工学設計演習Ⅰ」という授業です。

今回対象としている日立駅周辺商店街の活性化については、2012年度から2年間で活性化策の提案(下記報告書参照)までは行ってきましたが、それらの成果を踏まえつつ、2014年度は何でも良いからとにかく何か実践できないかと考え、有志学生による特別チームを編成し、まさに失敗覚悟で、学生に自由に企画・実践をしてもらいました。

地元商店会、市とも連携しながら、基本的に学生だけの力で、企画、運営、財源調達まで行い、他の授業や実験の合間の時間をみつけて、短期間で相当な苦勞をしながら、なんとか実践までこぎつけてくれました。

設計演習Ⅰでは、最初の1か月は個人ごとに対象地域を調査し、地域の抱える課題を発見、整理して発表を行います。最近学会でも多いポスター発表形式です。その後、8つの班に分かれて具体的な地域活性化方策を検討するフェーズに入るのが従来のやり方でしたが、2014年度は同地域で3年目ということもあり、従来通りの活性化方策提案班に加え、有志学生による実践班を募るとともに、その他にも地域の抱える問題やニーズに関してオリジナルの調査・分析を深く行うこともOKとしました。この調査・分析を選んだ班は、独自の問題意識や仮説を検討し、地元高校生や日立製作所などへのアンケート調査を行いました。詳細は割愛しますが、短期間で有益な Output を出すのは極めて難しいなか、各班はオリジナルのアンケート(WEB アンケート技術も援用)を実施し、一定程度の結果を得ることができました。



2012~13の学生提案報告書

<http://trans.civil.ibaraki.ac.jp/sekkeiensyu>

2013report.pdf

■実践班による企画

さて、今回紹介する実践班の取り組みですが、実践した内容は「商店街の空き店舗を活用した無料学習室の開放」です。実践内容の検討段階では、班内でブレインストーミングを行い、集客性と継続性の2軸から様々な案を検討し、学習室を含め、朝市やコンサート、映画上映など様々な案が出ていたようですが、集客性、そして何より継続性を重視して学習室に決定したとのこと。今回は授業の一環で短期間の実施ですが、仮に本格的にやろうとした時にイベント性よりも息長く常に集客ができる企画を重視していました。実際にこれまでも月1回のイベントは商店街で多数開催してきた実績があり、その瞬間は多数の来客がありますが、通常時への波及効果が大きな課題だったのです。

最終的に決定した「学習室」。当初は実践班学生の確信とは裏腹に、教員の反応は実は鈍い面もありました。短期の実践で本当に客が来るのか、既存の施設との差別化はどうか、などが気になりましたが、彼らの高校時代の実体験、放課後に友人同士で勉強できるカフェやファストフード店の撤退、日立シビックセンター学習室のキャパオーバー（机確保のために行列している）、それら学習スペースの制約（静かにしないと怒られ、色々と相談しながら勉強できない）など、中高生が感じている問題やニーズを的確に調査、分析し、商店会の方からも背中を押してもらい、「学習室」案で決定しました。短期間のみの実践でありながらイベント性を捨てた企画ということで大きなチャレンジであったと思います。この「学習室」の基本コンセプトとしては、「商店街に散在する空き店舗を有効活用し、単なる商業機能ではなくコミュニティ機能、たとえば「第3の場」の提供により商店街への来訪者を増やし、商店街・中心市街地の活性化につなげる」ことです。そのための前提条件や考慮した点は、①長期での継続性（上述）、②地元高校生の学習スペースへのニーズ（上述）と既存学習室との差別化、③学習室に協賛店の広告・デリバリーメニューを掲示（後述）です。②については、図書館などの既存学習スペースと差別化するため、私語厳禁ではなく「教えあう」空間の創出、また、現役大学生が勉強を教え、実際の大学生活を学生に話すなどをし、コミュニケーションをとることで、高校生と大学生のつながりを形成、さらに、高校生のニーズをもとに開放時間を延ばすことでも差別化を行ったとのことでした。

そして、その後は学習室の運営内容の詳細検討に加え、場所と財源の確保へと検討のフェーズは移りました。



実践企画案の検討段階資料

■商店街空き店舗の調査・選定・交渉と資金調達

実践班学生のアルバイト先オーナーの方からの情報提供や本授業に協力を頂いている地元商店会の方からの紹介を頂き、二転三転しながらも、最終的に日立商店街銀座モールのベストケアスクール 1 階のスペースを借りることができました。短期で借りることの制約、賃料・光熱費、部屋の清掃や什器類の設置可否など、多くの壁が立ちはだかり、何度か教員や TA にも相談を繰り返しつつ、最後は絶対にやり遂げるという彼らの信念と努力で、ギリギリのタイミングで契約までこぎつけてくれました。この時点で学習室開放まで3週間を切っていました。

賃料を含めた運営費も、基本的に学生だけの力でマネージしました。教員からの援助は受けない！というド根性精神で、地元商店・企業へ企画書を持って協賛金集めに奔走です。ここでの一計は、学習室

に商店街のお店を案内・宣伝できる案内板を設置し、協賛店の宣伝を可能にしたことです。近年の商店街のあり方としてコミュニティ機能に着目した企画でしたが、従来からの本来的な商業機能への波及効果もねらい、学習室への来客者が協賛店の案内ちらしと特別デリバリーサービスを使って、飲食物を購入できるようにしたのです。ここも教員の予想を大いに裏切り、教室開放の直前までで16商店からの協賛を集め、そこに3年生全員からのカンパも加え、運営費を確保したのです。

■ 広報・宣伝、会場準備

実施までの壁はまだ続きます。肝心の集客方法です。今回の企画は地元高校生を対象にしたので、商店街の周辺高校、特に日立駅を利用することと進学校であるかどうかをポイントに高校を選定し、彼らの母校も含め周辺4校へ直接宣伝に行きました。高校の掲示板にちらしを貼ってもらいましたが、在学生への積極的な広報は困難だったようです。最近の学生さんらしく Facebook と Twitter といった SNS もフル活用でした。あとは知り合いを通じた口コミによる草の根広報活動です。実際、広報・宣伝を始めたとき、教室開放まで1週間を切っていたため、極めて短期間の広報でした。前期の講義期間の中で企画から会場確保、資金調達、実践、事後分析と報告まで全てを行うこと自体に限界があり、広報に十分な時間を使うことはできませんでした。開店日2～3日前から空き店舗の掃除、内装、机・椅子の搬入、看板や協賛店チラシの作成など、会場の準備も大急ぎで行いました。このような中、運命の開店日7月1日を迎えたのです。宣伝不足もあり、実践班学生本人たちも本当にお客さんが来てくれるか不安そうでした。教員サイドも、ここまでの成果だけで既に十分という気持ちもありましたが、多くのお客さんが来て彼らの努力が報われて欲しいと祈るような気持ちでした。



SNS (Twitter、Facebook) による宣伝



商店街協賛店の案内・デリバリー受付コーナー

■茨大生による無料学習室の開放

7月1日(火)17時、いよいよ学習室の実践・開放の日を迎えました。学習室の名称は「At a Mall〜あったまる」に決定。始まる前からそれまでの準備で既に班員学生は疲労困憊の様子でした。担当教員・TAも開放時間の少し前に会場に向かいました。開店30分前にはすでに2名の高校生が入口前で開店を待っていました。草の根口コミの成果のようでした。開店後、少しずつですが新たな高校生が来室し、実践班である大学生と楽しく談笑しながら、翌日の高校での定期試験に向けた勉強をしていました。初日は5名の高校生が来室。短い広報期間にも関わらず初日から来客。地元高校生のニーズに対する彼らの仮説をさっそく証明してみせたのです。

学習室はトータル1週間の開放なので、あと6日間続きます。翌日からも彼らは集客の手を緩めません。学習室を走らせながら、一方で追加の広報作戦も展開します。場所が分かりづらいという意見を聞いたのでFacebook上で各高校からの詳細な経路を地図で示したり、各高校からの帰宅学生に路上で宣伝したり・・・、既に一授業の枠を超え、やるからにはトコトンやる覚悟と、一方で疲労も限界まできているが実際の来客を見た後の彼らの誇らしげな顔、楽しそうな姿を見て、教員サイドも彼らの活動を誇らしく見守りながら、どこまで成功するか非常に楽しみにしていました。教室開放の直前には大学の広報室にも宣伝を依頼し、そのお陰もあって、地元ケーブルテレビJWAY、FMひたち、NHK水戸、茨城新聞の取材を受けることにもなりました。2日目はなんと・・・15名の来客！茨大学生のパワーと能力に脱帽した瞬間でした。

7月4日にはJWAY、NHKで学習室の取り組みが放映され、放映をみた方の来客もありました。学生達は連続取材に対応し、最後の方はすっかり取材慣れしていました。雨天の時など客足が止まった日もありましたが、土日も含め、最終的にはトータルで53名の利用でした。大成功です。途中、実践班以外の学生さんもヘルプで講師役を務めてくれていました。なお、中にはNHKニュースなどをみて利用した小学生もいました。

来室した高校生にアンケート調査も行っており、ほとんどの人が企画内容に肯定的で満足して帰っていきました。今後も続けてほしいという要望も数多くありました。実践班のねらい通り、単なる学習ス

ペースとしての機能だけでなく、現役大学生と直接話ができ、今後の進路を考えている高校生にとって、大学で学ぶ内容や授業のこと、生活の様子などを聞けることも大きなメリットのようでした。



学習室の様子



勉強を教えている様子①



勉強を教えている様子②

■ワークショップの開催

学習室の開放だけではなく、7月6日（土）の午前には「商店街と学ぶ～茨大生がつくるシェアスペース」と題してワークショップも開催しました。目的は、地元商店街、周辺住民、市役所、学生といった多様な関係者と、今回実践した学習室の内容や今後の展開可能性について議論を行うことです。この企画も実践班の学生自身が行い、土曜の午前だけ学習室をお休みにして、このワークショップを開催しました。こちらも積極的に広報を行い、結果20名の参加者を集めることができました。最初に、昨年度取り組んだ学生（4年生）から過去の経緯や提案した活性化方策の概要を紹介し、次に今回の実践内容について実践班から紹介を行いました。その後、円卓を囲んで、実践班の2名がファシリテータとなって議論を展開しました。議論は盛り上がり、最終的には今回のアイデアの可能性と今後への期待を共有しつつ、本格的に継続運営するためには色々な課題があること分かり、それに対する新たなアイデアも多く出されました。詳細は別の機会に譲りますが、1年を通した中高生の学習室へのニーズや提供すべきサービスの内容は何か、大学生が先生役で参画するインセンティブが欲しい、大学生と高校生の交流という面では他の大学学生にも来て欲しい、大学の夏休み時は日立へ帰省する大学生も参加可能、スペースの提供を含め地域、商店街、市、大学、学生が連携して事業化し、地元の活性化に繋げるべき、といった意見が出ていました。ワークショップの運営自体も実践班学生にとっては貴重な体験だったようです。

県北鹿行

鹿嶋支社
鉾田支局
行方支局

☎0299(82)1730 ファクス(83)3700
☎0291(32)2501 ファクス(32)3478
☎0299(80)6130 ファクス(80)6131
◇身近な情報をお寄せください

空き店舗に無料学習室



商店街活性化について話し合う学生ら＝日立市弁天町

学習室は今月初め、「ひたされた。市は「若い人の感性
ちぎんぎもーる」の商店会」に平で学習室の仕組みについて掘
日午後5時～9時、土日は平日下げてほしい」と期
後1時～6時まで開設し、塾待している。
講師の経験がある学生などが、市にまわると、ひたちぎんぎ
個別に学習をサポートした。もーる商店会は1968年に
ディスカッションでは「学は66の商店があったが、88年
習室という発想は今までになに61店、2011年には31店
く、切り口がいい」という旨にまで減少。東日本大震災に
定的意見がある一方、「学習による建物整備で取り壊れ、
する様子が見えぬ場所。駐車場になった場所も目立っ
の方がよい」などの指摘もなっている。

茨城大工学部の学生ら

日立市中心部の商店街活性化の一助になればと、茨城大工学部
(同市中成沢町)の学生たちが空き店舗を利用し、高校生を対象に
した無料学習室を1週間限定で開設した。期間中、市職員や店主
らも参加してディスカッションを行い、学習室の課題や今後の運営
方法などについて活発に意見交換した。

日立の商店街に1週間限定開設 高校生の勉強サポート

「こつた現状を踏まえ、13
年度から都市システム工学科
3年の授業の一環で同商店街
の活性化策を研究し、今回初
めて9人の学生が学外で実践
した。学習室を開設した理由
について、増子沙也香さん
(20)は「ファストフード店は
閉店し、駅前の図書館はいつ
も満員。学生が気軽に集える
場所が必要だと感じた」と語
った。
学生たちは約1カ月という
短い期間の中で、店主の
一人一人に企画を説明して協賛
金を募るなど準備に奮闘。集
客を第一に考え、周辺高校へ
チラシを配布し、ツイッター
やフェイスブックを活用する
など宣伝にも力を入れた。1
日平均10人が訪れ、高校3年
生は大学進学や各教科の勉強
法について熱心に質問し、大
学生も積極的に学生に声を掛
けて交流を深めながら学ぶ
空間となった。
学習室を利用した高校生た
ちは「夏休みもやっていたほい
「教えてもらったところが翌
日のテストに出題され、解
くことができた」などアツケ
ートに回答。また周辺の飲食
店を利用し、売り上げにも貢
献した。
学生を指導する平田輝満准
教授は「学習室を継続する
かは未定だが、今回の演習で学
んだことを今後に生かすこと
も、大学と地域が連携して
課題克服を図っていきたい」
と話した。
(市毛雅奈子)

「こつた現状を踏まえ、13
年度から都市システム工学科
3年の授業の一環で同商店街
の活性化策を研究し、今回初
めて9人の学生が学外で実践
した。学習室を開設した理由
について、増子沙也香さん
(20)は「ファストフード店は
閉店し、駅前の図書館はいつ
も満員。学生が気軽に集える
場所が必要だと感じた」と語
った。
学生たちは約1カ月という
短い期間の中で、店主の
一人一人に企画を説明して協賛
金を募るなど準備に奮闘。集
客を第一に考え、周辺高校へ
チラシを配布し、ツイッター
やフェイスブックを活用する
など宣伝にも力を入れた。1
日平均10人が訪れ、高校3年
生は大学進学や各教科の勉強
法について熱心に質問し、大
学生も積極的に学生に声を掛
けて交流を深めながら学ぶ
空間となった。
学習室を利用した高校生た
ちは「夏休みもやっていたほい
「教えてもらったところが翌
日のテストに出題され、解
くことができた」などアツケ
ートに回答。また周辺の飲食
店を利用し、売り上げにも貢
献した。
学生を指導する平田輝満准
教授は「学習室を継続する
かは未定だが、今回の演習で学
んだことを今後に生かすこと
も、大学と地域が連携して
課題克服を図っていきたい」
と話した。
(市毛雅奈子)

「こつた現状を踏まえ、13
年度から都市システム工学科
3年の授業の一環で同商店街
の活性化策を研究し、今回初
めて9人の学生が学外で実践
した。学習室を開設した理由
について、増子沙也香さん
(20)は「ファストフード店は
閉店し、駅前の図書館はいつ
も満員。学生が気軽に集える
場所が必要だと感じた」と語
った。
学生たちは約1カ月という
短い期間の中で、店主の
一人一人に企画を説明して協賛
金を募るなど準備に奮闘。集
客を第一に考え、周辺高校へ
チラシを配布し、ツイッター
やフェイスブックを活用する
など宣伝にも力を入れた。1
日平均10人が訪れ、高校3年
生は大学進学や各教科の勉強
法について熱心に質問し、大
学生も積極的に学生に声を掛
けて交流を深めながら学ぶ
空間となった。
学習室を利用した高校生た
ちは「夏休みもやっていたほい
「教えてもらったところが翌
日のテストに出題され、解
くことができた」などアツケ
ートに回答。また周辺の飲食
店を利用し、売り上げにも貢
献した。
学生を指導する平田輝満准
教授は「学習室を継続する
かは未定だが、今回の演習で学
んだことを今後に生かすこと
も、大学と地域が連携して
課題克服を図っていきたい」
と話した。
(市毛雅奈子)

ワークショップの開催内容を伝える新聞記事(出典:茨城新聞2014年7月15日朝刊)

■今後の展開

7月23日の最終成果発表会では、商店会の方・地元地域計画のシンクタンクの方なども招き、他の班(調査分析班・提案班)の発表も含め、実践班からの報告も行いました。今回の企画・実践の成果と分析、また、今後の展開に向けた課題と対策についても考察してまとめています。これらの内容は別途報告書などでまとめたいと考えています。今回は失敗覚悟で臨んだ実践班の試みでしたが、初年度から地域の関心を強烈に惹きつける程の成果を出す結果となり、ひとえに学生諸子の能力と努力の賜物でした。一方で、実践班の学生は当該授業以外の授業や課題、実験等を行いながら、その空いた時間で上記のような活動をしており、相当な負担であったことは確かです。貴重な経験であったとは思いますが、そのような負担の上に成り立っていた成果でもあります。その他にも授業の一環でやるには様々な課題もあります。大学と地域の連携、それによる地域の活性化が謳われて久しいですが、今回の演習授業の成果は、地域にとっての大きな交流人口たる大学学生が、地域連携の中でどのように貢献することが可能なのか、学生自身が何を学ぶか、高校生と大学生さらには地域の老若男女の交流がどのように促進され地域がどう活性化できるかなど、今後の大学と地域の連携を考える上で大きな参考となるのではないかと考えています。今年度は試験的に実践を試みましたが、次年度以降どうするかは今年度の成果を踏まえて検討中です。地域の方々との意見交換の場でのご意見も踏まえて今後の展開を考えたいと思います。



最終成果発表会の様子



学習室の実践終了後の記念撮影（実践班メンバー。学習室前にて。）

文責：平田輝満（茨城大工学部）